
とある魔術の必要悪

禁句

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の必要悪

【コード】

N9753P

【作者名】

禁句

【あらすじ】

初作品です

誤字、脱字が多く読みにくいとは思いますが指摘して頂けると嬉しいです

オリ主

イギリス清教における魔術を司る部門、必要悪の教会。その一員である日本人、遥時雄^{ようちゆう}。

彼は幼少時に魔術による事故に遭い、否応なしに魔術の世界へと巻き込まれてしまっていた。

果たして彼は何を望み、何を叶えるのか？

フラグはそこそこ立てていく予定

基本原作に沿ってやりつつ細かいところを変えていきます

1 目覚め

目を覚ますと見慣れた天井があつた。

此処はイギリス清教所属、必要悪の教会、ネセサリウス男子寮である。

その寮の一室、ベッドの上で俺は目を覚ました。

……胸いっぱい煙を吸い込んで。

「御早う。遅い目覚めだね。日本人は勤勉だとよく聞くけれど、君は例外なのかな？ようじゆう遥時雄」

そこに、恐らく犯人であろう赤毛の大男、ステイル「マグヌスが皮肉をたつぷりに挨拶をしてきた。

「お前が早すぎるだけだ！お前の煙草のせいで寝覚めが最悪だ。控える」

俺は煙草の煙が好きではない。そもそも、火事によって両親を失っている自分と火を扱うことを得意とする彼とは相容れる事は出来ないのかもしれない。

まあ、同僚として彼の魔術の技量は認めない事は無いが…

「ふん、君の気分が悪くなるうが僕には関係ないさ。それよりも、

僕らには昼から任務があることを忘れてはいないだろうね」

「勿論。俺がそこまでズボラだと思ったかい？14歳のステイル・マグヌス君？」

驚いた事にこの身長が2mも有りそうな大男は14歳である。

しかも、14歳の癖に煙草を吸っていて、半ばニコチン中毒の気配すら有る。

「なら良いさ。精々足を引っ張らない様にしろ！」

ステイルは声を荒げて部屋を出ていった。

いくら大人びているとはいえ、思春期真っ盛りの14歳である彼は馬鹿にされた事を感じ取ったらしく、機嫌を悪くした様だ。

それよりも、任務まで時間はあまり無いようだし急がなければいけないな…。

俺は準備を急いで済ませ、招集場所へ急いだ。

そして昼前、俺達は総大司教に呼び出され、セントジョージ大聖堂に赴いた。

聞いたところによると、今回の任務は学園都市へと向かう十万三千冊の護衛、それも世界に20人しかいない聖人の一人である神裂火織付き、という大層な内容だそうだ。

神裂火織と俺は同じ日本人という事も有り、現在学園都市でスパイ活動中の土御門元春共々、それなりに親交の有る人物だ。

聖人という人間の範疇に収まらない身体能力を持っており、彼女が出動する任務は困難な任務か、彼女をイギリス清教に繋ぎ止めておく為の禁書目録に関する任務しか無い。

今回は、科学の総本山、超能力者の園である学園都市へと訪問させる任務。

禁書目録の護衛には困難が付いてくるだろう。

俺は久しぶりに手応えのありそうな任務に心を躍らせていた。

しかし、それが俺にとっての物語の始まりだとはこの時は夢にも思わなかったのだった。

1 目覚め（後書き）

初投稿です

至らない所も多いですが、感想などで指摘して頂けると嬉しいです

^^

2 脱走

十万三千冊の魔導書、その全てを記憶する完全記憶能力を持った少女。禁書目録。

彼女はその脳の容量を十万三千冊に圧迫されているため、1年に一度記憶を消去しなければならないらしい。

胡散臭い事この上ないが、教会の上の奴等がそう公言している以上、下の人間である俺達はそれに従って行動するしかない。

その記憶消去に対して、一番反発的なのがステイルと神裂の二人である。

2人は彼女の友達、或いは兄妹として彼女と接していた者達であり、彼女の記憶のリミットである1年間を最も長く過ごした2人だ。

その2人は前回、1年前の記憶消去を担当し、彼女は記憶を失った。

その後2人は彼女に対して厳しく当たる事にした。

魔術、魔術師を怖れるように仕向けた。

組織の人間として、無機質に。

情を残さぬように、無感情に。

結果、彼らは彼女に避けられる事となった。
彼女は彼らの思惑通り、魔術師を嫌った。

俺は嫌われながらも、避けられながらも、彼女を守ろうとする彼らを見た。

彼女の症状をなんとかかするため、血反吐を吐くまで努力するステイルを見た。

聖人でありながら、少女との絆さえ守れないと嘆く神裂を見た。

誰よりも不幸な少女に、何もしてやれない俺が……居た。

彼らの努力は伝わる事なく、
いや、伝える事が出来ず、
今日。

この学園都市で
十万三千冊は魔術師の元から逃げ出した。

完全に不意を突かれた。
彼女の行動力を甘く見すぎていた。

移動中、静かに小さく縮こまっていたのは虎視眈々と脱走の好機を狙っていたからだったのか。

すぐさま俺達には護衛から搜索への命令変更が言い渡された。

『次の記憶消去迄に保護し、彼女の命を救助せよ』と…

2 脱走（後書き）

次回原作突入

やっと主人公が本格的に出せます（汗

3 遭遇（前書き）

原作突入直前
原作迄いけなかった…

3 遭遇

逃げ出した彼女を追うため、ステイルは探索系の術式を発動させた。彼女の着ている修道服、『歩く教会』には膨大な魔力が込められており、其れを辿る事で彼女を見つけよう、という事だ。しかし、これには一つの欠点があった。

「∴西方に300mの地点に彼女は居る」

「それで、その場所への道筋は？」

「∴不明だ。取り敢えず向かうしか無い。急ぐぞ」

詰まり、土地勘の無い場所で使っても、対象迄の距離と方角しか判らず、後は自力で探すしか無いのだ。

仕方なく俺達は西に向かって走り出した。

だが、学園都市はビルが乱立し、入り組んでいるので、向かう先、向かう先が行き止まりに当たってしまう。

3人のうちの誰もが土地勘の無い者ばかりなのだ。終いには自分達が今何処にいて、彼女が何処にいるのかさえ判らなくなってしまった。そこで、俺は提案した。

「なあ、ここは各自で別れて搜索する事にしないか？このままじゃ埒があかないだろう」

其れに対して、ステイルと神裂は

「それもそうだね、僕もそう思っていた所だ。それに、手分けした方が見つかる確率も上がるだろうしね」

「ならば私は高所から探して見る事にします。あの子を見つけたら連絡を取る事にしましょう。」

と、すんなりと乗ってくれたので、夜迄に見つからなかった場合の集合場所だけ決めて解散した。

ここらで俺の魔術について説明しておこう。

俺の扱う魔術は端的に表すと、召喚と使役に特化した魔術である。故に使用するにはある程度の空間と時間が必要なのだ。

使役するのが魔獣、幻獣の類なので人の目に触れる事も危険だ。本来ならば捜索に参加するには不適格な魔術。

俺は悩みながら召喚の場所として選んだビルの屋上で、人の目に触れにくい魔獣を何体か召喚し、捜索に当たらせることにした。

1時間後、探索に放った魔物のうち、八咫鳥ヤタガラスから発見の報告がきた。第七学区のとあるビルの屋上にいるようだ。

俺はステイルと神裂に連絡を入れた後、急いで発見現場へ向かった。

現場に着いてみると、八咫鳥と白い修道服を着た少女が揉み合っていた。

少女はこちらに気づいた様で、慌てて逃げ出そうとする。

しかし、八咫鳥がしがみついているので中々逃げる事はできない。

俺は少女に向かって言った。

「さて、キミ。十万三千冊。茶番は此処迄にしよう。俺も仕事なのでね、キミを連れ戻さなくてはいけない。さあ、戻ってくるんだ。キミの居場所はこの科学の街にはない。」

「嫌だよ！どうせ戻ったってわたしを助けてくれる人はいないもん！居場所なんてあなたたちの所にもない！だからわたしは、ぜったいあなたたちの所には戻らない！」

と少女は叫び返す。

「そうか。それならば致し方無い。歩く教会も有る事だ、そう簡単に死ぬ事は無いだろうさ。…心苦しいが、力尽くてもキミを連れ戻す！」

俺は少女に向かい、宣言した。

だが、言い終わるや否や少女は八咫鳥の足に噛みつき、八咫鳥が怯んだ瞬間に戒めを振りほどいて、屋上の縁に足を乗せて力一杯に隣

のマンションに跳んだ。

しかし、少女の身体は今一歩マンションには届かず、落下して行ったのだった…

3 遭遇（後書き）

主人公は召喚師です。

4 激突（前書き）

原作開始

4 激突

落下した少女は上手くベランダに引つかかる事ができた様だ。

…そういえばあの寮には土御門が住んで居るのだったかな。

一応連絡を入れておくか…

P r r r r r r r r

「はいはいこちら土御門ですよー。」

「雄だ。そっちのマンションのベランダに保護対象が引つかかった。出来れば保護を頼みたいんだが…」

「あいあい、分かりましたですたい。それじゃー」

「待った、土御門。ツンツン頭の少年が対象を部屋に連れて入ってしまった。」

「あーらら…その少年、上条当麻に関しては俺では対処出来ないんだにゃー。所謂学園都市の重要人物ってヤツだぜい。どうする？雄」

「ならいい。後でこちらから接触しておく事にする。」

「ん、頼んだぜい。」

そう言つて土御門は電話を切った。

（それにしても、スパイ業も大変だろうな…怪しまれない範囲でしか動けない。もっとも、この得体のしれない街の主には全て見透かされているのかもしれないが…）

また夜にでも彼と接触するか、と適当に見切りを付け、兼ねてより楽しみにしていた学園都市観光を決行する事にした。

その数分後、「不幸だー！」の叫びが辺りに響くのであった。

学園都市散策をしていると、神裂から電話が入った。

とても狼狽していたので落ち着かせてから話を聞いてみると、禁書目録を発見したものの、逃げられそうになったので、歩く教会の防御を信じて足止めのもりで切りつけた所、歩く教会の防御が機能せず、彼女に深手を負わせてしまった、という事らしい。

俺が追い詰めていた時には未だ機能していたので、あの少年の所で何かがあったのだろうか。

生きて連れ帰れという上からのお達しが有るからには現状で放置して置いてはいけない。

此処は治癒魔法も使えるステイルに任せるとしよう。
幸いにも、俺には彼女が次に向かうだろう場所が分かっているのだし。

夜の学園都市、とある高校の学生寮。

そこで少年と大男が対峙している。

俺は昼間に禁書目録を追い詰めたビルの屋上から観戦中だ。
周囲には人払いをかけてあるので、暴れても有る程度迄なら問題ない。

早速ステイルが炎剣を使った。

一般人に対してそれでいいのかという気はするが、いちいち気にしては埒があかないので気にしない様にする。

これでステイルの勝ちか、と思った、その時
ステイルの手から炎剣が消えた。

(一体あの少年は何をしたんだ?)

ステイルの手からまた炎剣が出る。

しかし、今度も少年の手が触れた瞬間に消えた。

ステイルはそれに激昂し、ステイルの取って置き、文字通りの必殺であるイノケンティウスを発動させた。

今度も少年の手が触れ、掻き消えた。

しかし、イノケンティウスは復活する。

イノケンティウスの猛攻から少年は下の階へと逃げる事になってしまった。

少年は何を考えたのかスプリンクラーを作動させた。

(水で消そうというのか? 真逆、そんな事であいつのイノケンティウスは消えはしない。イノケンティウスを倒すには大元のルーンを消さなければ…成る程、そういう事か)

スプリンクラーでルーンが書かれた紙に水がかかりインクが滲み出す。

イノケンティウスもみるみる弱体化していく。

ステイルは慌てて炎剣を出す但其れも掻き消され、

少年の拳が吸い込まれる様にステイルの頬へと伸ばされたのだった。

4 激突（後書き）

戦闘って難しいんですね…
他の方々が言ってるらしいや、る事が良くわかりました

5 接触（前書き）

初上条さんとの接触

難産でした。

少年に敗れたステイルを回収する為、また、少年と接触する為に学生寮へと移った。

少年は禁書目録を担ぎ上げており、何処かへ運ぼうとしている様だった。

少年は俺に気付くと、身体を強張らせて身構えた。

「誰だ！お前も魔術師か？」

「俺か？イギリス清教必要悪の教会所属、遥時雄ようじゆうだ。そんなに警戒するな、今敵対するつもりは無い。そんな事より君の事を聞かせてくれ。君の、名前は？」

俺の言葉を聞いて、少しだけ警戒を緩めた少年は、答えた。

「…上条当麻だ。」

「そうか、上条君と言うのか。君に一つ訊ねたい事がある。さっきのステイルの炎を君は消していたが、あれはどうやっていたんだ？さっきから気になっていてな。」

見ている限りでは特別な事もせずにステイルの必殺さえ消してのけた。

ステイルも十四歳にして聖人と肩を並べて任務に当たる事のできるほどの高位の魔術師。その魔術をワンアクションで消してのける、それはまさしく異常である。

「どつって…ただこの右手で触っただけだ。俺の右手は異能なら神

様の奇跡さえ消せる特別製らしいからな。」

なんて事だ…右手で触れるだけで消せる能力、そんなものを学園都市は保有しているのか…

魔術師の天敵である為にある様な能力じゃ無いか。

「ふむ…君の様な能力を持った人間は学園都市に何人いるんだ？」

「異能を消す事ができるのは俺だけだと思う。俺の能力は学園都市製の人工モノじゃ無くて、生まれつきの天然モノだからな。」

「そうか、ありがとう。しかし気をつける事だ、上条君。次に会う時には禁書目録を返して貰う。その時には、敵同士かもな。」

言うと、俺はステイルを担ぎ上げてその場を離れた。

既に火災報知器の連絡を受けて消防隊が駆けつけている。

見つからない様にしなければな…

その後、神裂と合流し、上条当麻についての情報を伝えた。

そして、話し合った結果、神裂は個人的に少年と話をしたいらしく、後で接触する事に決まった。

神裂は彼の名を聞いて

「上条…当麻…。神浄の…討魔…フフフ」

と危ない言葉を呟いていたが、気にしない方向でいく事にしよう。

さて、ステイルもしばらく起きて来そうにないし、禁書目録の居場

所も特定できた。

禁書目録は当分上条君の所から動く事はないだろうから一応は安心だ。

俺たちの所においても逃げられてしまう恐れがある。

それならば、この学園都市で記憶消去の術式をしてしまった方が都合が良い。

上条君は神裂がいれば抑えられそうだし、後俺にできる事は待つだけかな。

そうと決まれば、もう夜も遅い事だし、寝床を見つけに行くとするか…

俺は快適な寝床を求めて学園都市の夜闇へと向かうのだった。

5 接触（後書き）

色々しんどかったです。

上条さんと主人公のバトルも書くつもりだったのですが、後に神裂が控えていたのでやめにしました。

主人公のバトルシーンは遠そうです…orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9753p/>

とある魔術の必要悪

2011年1月8日22時59分発行